「うーん…」
昼の明るい日差しが差し込むキッチンに、低く重苦しい声が響きました。
「どうしたの？」
通りかかったフランソワーズが何事かとキッチンをのぞきこみました。
「あら？」
誰もいません。
「でも今声が…？」
フランソワーズはあたりを見回して、すみっこで床に座りこんでいる張々湖を見つけました。
「張大人、一体どうしたの？」

「なんか今、変な声聞こえなかったか？」
グレートもおそるおそるキッチンをのぞきこみました。
「お？」
すみっこの張々湖と、一緒になって床に座っているフランソワーズに気づいて、グレートは目をぱちくりさせました。
「何だ？　捜し物か？」
「グレートも聞いてあげて」
張々湖は悩んでいるのだというのです。

中国へ帰るかどうか考えた末に、張々湖は日本に住むことにしたのでした。それで、働かなければと考えて、料理人になろうと思ったのだというのです。
それを聞いてフランソワーズがぱっと笑顔になりました。
「いいじゃない、大人のご飯おいしいし」
グレートも大きく頷きます。
「うむ。これ以上ないくらい良い選択だと思う」
でも、張々湖はふうっと大きなため息をついて、ゆっくり立ち上がりました。
「それがプロを目指すとなるとねぇ」

自分は中国の料理の味なら、まあまあ自信を持って作ることができると思う。だけど、日本でプロとしてやっていく気なら日本人好みの味を作れないと駄目だと思う。でも自分はまだ日本の味というのがいまいち判っていないような気がして。
そう言う張々湖を、フランソワーズがなぐさめるように言いました。
「でも私は大人のごはんはとってもおいしいと思うわよ。日本育ちのジョーだって、いつもおいしそうに食べてるじゃない。そんなこと気にしなくても、きっと大丈夫よ」